

第二次上海事変

昭和12年度

8月14日 左の通り動員を下令せらる。当時の残員別紙の如し。

(隊長以上)

- 1、第5動員1号
- 2、第14動員4号
- 3、第16動員1号及2号

22日 動員完結。多度津出発。青島に向ふ。海上波静。

29日 大連港着。後半日埠頭に停泊。情況の変化に依り急遽上海に向ひ航行を開始。

9月3日 黎明、吳淞鎮に上陸。当日温度約百二十度、正に炎熱焼くが如し。人員3,818名、馬匹716頭。

当日、左記軍命令を受く。

「天谷支隊ハ速カニ宝山城西側ノ敵陣地ヲ攻略シテ目下揚子江ニ沿ヒ東進中ノ浅間支隊ト連絡シ該支隊ト協カシテ月浦鎮附近ノ敵ヲ撃滅シテ羅店鎮附近ニ一ハ以テ現在優勢ナル敵ニ包圍セラレアル第十一師団主カヲ救ヒ一ハ以テ軍主カト第十一師団主カトノ通路ヲ確定スル」の任務を受け、先づ以て宝山城西側の敵を撃破、浅間支隊と手を握る為支隊命令を受く。而して聯隊の上陸作業は四日午前中を要すべき形勢に在りしを以て、〔軍命令の書き方不明確、加工した〕

四日は攻撃前進の準備をなす。

当時の聯隊長	陸軍歩兵大佐	安達 二十三
聯隊副官	全 少佐	加川 眼宗一
第一大隊長	陸軍歩兵少佐	布上 照一
第二大隊長	全	梶佐古 景行
第三大隊長	全	道下 義行

昭和12年9月

昭和12年9月4日より6日に亘り、宝山城西方地区に於ける戦闘を緒戦とし、爾後月浦鎮・羅店鎮・南翔・鎮江・揚州と転戦す。

○宝山城西方地区の戦闘経過の概要左の如し。

〔9月4日〕歩兵第12聯隊（第3大隊欠）は任務に基き、西門大街吳家上樓を攻略し、沙奄口に進出し、先づ歩兵第43聯隊と連絡するに決す。之が為、歩兵第12聯隊長の採りたる攻撃方針左の如し、支隊は5日、樹家庄北側より曹家浜西北側に亘る線に展開し、午前7時より攻撃開始、先づ砲兵を以て敵を制圧し、次で戦車に依る敵圧倒蹂躪の機を失せず、敵を突破前進す。

聯隊（第3大隊欠）は第一線として当面の敵の攻撃を命ぜられ、4日早朝より井上将校斥候をして金家宅－吳淞道を偵察せしめると共に、午前2時聯隊長は大砲隊長を連行し、当面の敵情地形を偵察し、薄暮第一大隊（3・4欠）を佩家村、第二大隊を齊家村に前進せしめ、聯隊本部は七時過ぎ齊家村に進出し、明日の攻撃準備をなす。

9月5日 午前6時30分、第一大隊（3・4欠、1/2RiAを附す）は右第一線庄曹家浜北方無名部落の線に、第二大隊（8欠、1/2RiA附す）は左第一線曹家浜より其の西方無名部落の線に展開し、吳家上樓の敵に対し各々展開を完了。午前7時頃、第二大隊正面金家宅に掩蓋機関銃3あり、iAを以て其の一銃を破壊せり。

午前10時50分、少尉宮本敏太郎を派遣し、金家宅方面の状況を現認し、且つ第12師団と連絡せしむると共に、第3師団の攻撃不成功の場合、之を攻撃するに要する兵力の判断に就て、第2大隊長に連絡せしむ。

午後1時、第一大隊は独断を以て揚家浜を占領。午後1時半第一大隊は西門大街を占領。聯隊本部は午後2時30分六家南方十字路に進出す。第二大隊は概ね攻撃意の如く進み、午後三時頃吳家上樓を占領。本戦闘に於て第一大隊方面に於て独力攻撃可能と認め、砲兵の協力を俟たず独断突撃し、白兵戦を到る処に於て実施せり。第一大隊の攻撃奏効は第二大隊方面の攻撃を容易ならしめ、全般の戦闘を有利ならしめたり。

聯隊本部は午後3時40分西門大街西側へ進出す。宝山城攻撃のために、第8中隊を之に充てたり。第8中隊は、各小隊長を先頭とし側面縦隊を以て宝山城に前進す。城門前150米に達するや前方より急遽MGの射撃を受け、初めて茲に戦死傷者を出すに至れり。俘虜の言に依るに宝山城には敵約3,000ありて、続々と逃亡しありと。

支隊は本5日歩兵第四十三聯隊と確実に連絡を完了せり。

9月6日 朝、宝山城の敵は逐次西方に退却せり。天谷支隊（歩兵第12聯隊・山砲兵第11聯隊第3大隊を基幹とす）「支隊長 陸軍少将 天谷直次郎」は、9月6日夕孫家宅の線を占領し、月浦鎮に向ふ前進を準備す。爾后歩兵第43聯隊は支隊の右側に連繫し展開協同して月浦鎮に向ふ攻撃を準備す。第3大隊は概ね午後一時頃西門大街附近に前進し来り、引続き周家宅に向ひ前進せしむ。而して該地附近の一部の敵を撃退し、部落を掃蕩しつつ前進す。

宝山城西方地区戦闘に於ける所見として、支隊の攻撃精神の発露に依り戦闘を終始したることを第一とし、敵は我軍の概ね30分乃至1時間の砲撃をなしたる後突入するを慣用戦法と考へ油断に乗じ、昼間奇襲的に突破したることを第二とし、炎熱烈しく湯茶の補充に慣熟せざりし為、西門大街突

入后多く生水を使用するの止むなき状況に至り、遂に「コレラ」発生の因をなしたること第三とす。本戦闘に於て准士官以下38名の戦死者を出せり。

○9月7日より9月12日に至る月浦鎮附近に於ける戦闘の概要。

月浦鎮附近の戦闘は、敵戦略要点たる月浦鎮を圍繞する最後抵抗線周家宅・顧家宅の攻撃より、月浦鎮西方地区に進出する間の戦闘なり。本戦闘、就中周家宅・唐家宅の戦闘は、最も激烈を極めたる所にして、9月7日の攻撃開始より9日の唐家宅占領迄の我が損害戦死実に190名、負傷之に倍せり。就中9月9日は我が軍旗拝受紀念日にして将兵の志気期せずして昂り、其の激戦振りは一全戦闘間を通じ、其の比を見ざる所なり。

○月浦鎮附近の戦闘を経過に従ひ、左の如く区分す。

- 1、周家宅・顧家宅附近の戦闘（9月7日—全8日）
- 2、唐家宅・浦爽橋附近の戦闘（9月9日）
- 3、顧家宅・王家宅・真家宅の戦闘（9月10日）
- 4、北曹宅・南曹宅附近の戦闘（9月11日）
- 5、月浦鎮南方及西方地区に於ける戦闘（9月12日）

交戦せし敵兵力は約7、8千にして周家宅・唐家宅附近は第98師に属し、尚一部99師・14師混入しあり。

我が兵力は初期にありては約3千（非戦闘〔員〕を除く）ありしも、終期に於ては二千一二百名に減少せり。

○周家宅・顧家宅附近の戦闘

9月7日 諸斥候の報告等に基き、泗唐「クリーク」西岸近くには依然大なる敵を見ず、金家宅東南無名部落南端に槐蓋銃座らしき徴候を見、泗塘橋西南八百米陳家宅には一部の敵兵あるを知る。支隊は現在地附近に於て夜を徹し、明七日揚家橋・王家宅・周家宅・金家宅の線に向ひ前進を準備す。

戦闘経過、

午前10時、聯隊本部は周家宅より曹塘堂東方無名部落に進出す。午前12時には第一線の攻撃準備全くなり、唯攻撃前進の時機を俟つ。午後1時30分協力配属砲兵射撃開始と同時に第一線は攻撃前進に移れり。第一線大隊は一意攻撃を続け、午後2時頃第二大隊は小浜陳家宅の敵陣地を攻略し、顧家宅の敵に肉薄しつつあり。第三大隊方面は全く十字火を受けて前進極めて困難なる中を、一進一歩前進を続け、就中周家宅を攻撃せる第十中隊は中隊長田中睦夫大尉負傷せるにも拘らず、旺盛なる攻撃精神を維持して午後3時過ぎには敵前概ね150米に近接す。

第一線の情況に鑑み危急に應ずべく、第8中隊を前方に推進せしむるや、恰も敵迫撃砲の集中火を受け、中隊長中尉江藤五郎戦死、以下相当の損害

を受けたり。

聯隊本部は午後3時30分敵火の中を孫宅に移動す。当時第二大隊方面も將に激戦の状態なりしを以て、第七中隊を増加す。此の時、聯隊予備隊たるもの第八中隊の一部に過ぎざる状態なるを以て、新に第一大隊長の指揮する第一・第二中隊を増加せられ、直ちに鈴木主習大尉の指揮する第二中隊を黄家宅に派遣し、同地を掃蕩せしむると共に、金家宅攻撃中なる第十二中隊と連絡せしむ。

第三大隊は引続き攻撃を力攻するも敵火甚しく、敵前二一三〇〇米に於て日没となりたり。第九・第十中隊長は期せずして夜襲を決意し、右意見具申ありたるも、聯隊長は敵陣地の状態等より明日更に攻撃を加へたる后、攻略するを適當と認め、之を許可せず。

第二大隊方面に於ては、午後7時頃梅宅・三脚宅を占領し、新に配城せられたる第七中隊を第六中隊の右第一線に展開せしめ、顧家宅に対し猛攻を加へ、日没時迄に該部落の大部を攻略す。午後十時頃黄家宅附近の掃蕩を終り、第二中隊〔は〕聯隊本部の位置に復帰す。午後十一時更に鈴木大尉に命ずるに部下一小隊を以て第三大隊長の指揮下に入り第十二中隊を併せ指揮し、明朝砲兵射撃に適する如く区署すべきを以てす。鈴木大尉は直ちに黄家宅に進出し、第十二中隊の掌握に任じ、同日午前九時四十五分確実に之を掌握せり。

9月8日に於ける戦闘

午前一時四十分別命を下達、第一線をして工事を実施せしめ、本未明より行ふ周家宅に対する攻撃再興の準備をなす。午前六時三十分周家宅に対し山砲兵試射を開始す。午前七時二十分戦車小隊を配属せらる。直ちに第三大隊に之を配属。午前八時更に戦車中隊の主力を配属せらる。之を第二大隊長に配属す。而して午前七時より周家宅及其の南方無名部落に対し実施せる四十分間の砲兵集中射撃の最終弾に膚接して第三大隊は攻撃前進を開始し、激戦を交ふること数時間、第十中隊先づ戦車中隊と協力して午前十時四十分周家宅を、第九中隊を以て其の南方無名部落を占領す。

第二大隊方面も勇戦良く勉め、概ね同時刻第六・第七中隊を以て全く顧家宅を占領せり。敵は金家宅及び其の北方無名部落の「クリーク」を利用し頑強に抵抗を持続す。

本戦闘に依る敵兵力団体号第九十八師に属するものにして、其の兵力明かならざるも最小限度に見て千五百を下らず。其の有する機関銃数は左側方面の掩護機関銃を除き正面のみにて実に三十有余に上る。

9月9日の戦闘

第一大隊は、本早朝より金家宅附近の敵を攻撃前進中、浦夾橋東方二〇〇

米「クリーク」の線に進出。此の時敵弾に依り大隊長少佐布上照一、大尉清水高蔵負傷。山道豊吉大尉、江島正三少尉戦死。一時現在地に位置し隊伍を整理す。聯隊副官少佐加川勝永、第一大隊長に篠田健一中尉を聯隊副官代理とし、第二大隊は、午前十時五十分無名部落を攻略す。好漢少尉井上寛は率先陣頭に立ち、掩蓋機関銃座に斬り込み、敵数名を斃し壮烈なる戦死を遂げたり。松家小隊は浦火橋の敵攻撃に策応すべく独断攻撃前進し、中尉松家芳輝以下多数の死傷を生ず。此れが収容は第三中隊を以てす。

9月10日の戦闘

昨夜、浦夾橋・王家宅附近に銃声絶ゆることなく、再三敵逆襲し来るも悉く之を撃退せり。午前十時三十分より王家宅・顧家宅・貞家宅に対し砲撃す。砲声正に殷々たり。之を利用して敵陣地に近接、第一大隊は午前十一時三十分王家宅に進入、引続き残敵を掃蕩。顧家宅の敵頑強に抵抗せるも午後六時前全く潰走せり。午後〇時該地を占領。

9月11日の戦闘

午後〇時五十分より北曹宅に三分間の集中射撃、聯隊は砲兵の最終弾に膚接して攻撃前進。各方面より側防火を受け前進困難なりしも適切なる歩砲協同に依り午後三時十分東部北曹宅及び孫宅を占領し、引続き北剣干に向ひ攻撃を続行するも所命地点に至らず。月浦鎮より側射を受く〔る〕を以て之を焼却せしめ本夜現態勢を以て夜を徹す。

9月12日の戦闘

本日の攻撃は概ね昨日に準じ砲兵射撃を実施して突入する予定なりしも、本早朝宮本敏太郎少尉の指揮せる一小隊、敵なしと判断し、独断月浦鎮を突破して其の西方に進出す。大なる戦闘なし。

◎羅店鎮東南方地区に於ける戦闘

羅店鎮東南方附近及び羅店鎮附近の戦闘とは、月浦鎮攻撃より天谷支隊が名実共に師団長の指揮下に入り、師団の一翼隊として攻撃を開始せしより、軍の総攻撃を準備する間、即ち九月十三日より十月十三日迄の戦闘なり。此の間の戦闘を便宜上左の如く区分す。

- 1、追撃戦及呉家橋の戦闘（九月十三日～九月十五日）
- 2、小顧宅及候家宅の戦闘（九月十六日～九月十七日）
- 3、朱家宅・厝湾・梅尤宅附近の戦闘（九月十九日～九月二十四日）
- 4、郭家宅附近の戦闘（九月二十六日）
- 5、陶家宅・金家宅附近の戦闘（九月二十六日～九月三十日）
- 6、北覧溝・周家宅・丁家宅附近の戦闘（十月一日～十月十日）

交戦せし彼我兵力及団体号

交戦せし敵兵力一万を下らず。加ふるに自動火器の数我に比して甚だ多く、

周家宅・唐家宅附近の陣地に比すれば、其の設備に於て若干劣る感あるも、小顧宅・候家宅・吳家橋附近に於ける守備兵力は反って多数に上りあり。而して吳家橋・小顧宅附近の敵は第四路軍教導旅に属し、素質良好にして人員補充も極めて迅速なり。即ち一掩蓋銃撲滅せりと判断するも、直ちに復旧するが如き状態なり。其の他同地附近に九八師・九九師・十四師に属するもの相当あり。朱家宅・張家宅附近は五九師、厝灣附近は九〇師、周家宅附近は四四師に属しあり。尚一部一四師・七七師混入しあり。而して、敵後方に移動するを以て退却すと判断するは誤にして、新兵団の交代する場合極めて多し。之に対抗せる我兵力は戦闘初期に於ては、二千三百名近くありしも、逐次減少して人員補充を受くる以前は、聯隊の戦闘員僅かに千名に足らざる状況なり。最も少き中隊にありては中隊長以下二十数名となり、激務に堪え得るもの僅かに数十名に過ぎず。

敵に与へたる損害

敵に与へし損害実に多大にして遺棄死体のみにてても千三百を下らず。其の他俘虜齒獲品等多数あり。羅店鎮附近の戦闘に於て左記の通、軍司令官より感状を授与せらる。

感 状

天谷支隊

長歩兵第十旅団長 天谷直次郎

歩兵第十旅団司令部

歩兵第十二聯隊

独立機関銃第七大隊（一中隊欠）

戦車第五大隊第二中隊

山砲兵第十一聯隊第一大隊

野戦重砲兵第十聯隊（一大隊聯隊段列半部

欠）

迫撃第四大隊（一中隊欠）

工兵第十一聯隊ノ一中隊（半部欠）

第十一師団通信隊 三分ノ一

第十一師団衛生隊 三分ノ一

第九師団第一架橋材料中隊ノ一小隊

天谷支隊（九月三日吳淞ニ上陸スルヤ急遽前進ヲ開始シテ宝山城西方地区ノ敵陣地ヲ攻略シ爾後歩兵第四十三聯隊長ノ指揮スル部隊ヲ併セ指揮シ其ノ切実ナル協力ノ下二月浦鎮ノ堅壘ヲ屠リ更ニ羅店鎮東南方淑里橋小顧宅ノ既設陣地ヲ占領セリ此間連

続戦闘ニ従事スルコト正二十日陣地ノ突破距離凡ソ十一軒戰場ハ至ル所「クリーク」
錯綜シ所在ノ部落ハ凡テ陣地ニシテ優勢ナル敵充滿シ特二月浦鎮ハ其ノ要衝ニシテ
肉薄突撃反覆六日ニ及ヒ歩兵聯隊ノ将校以下死傷続出シ酷熱ニ加フルニ病疫ノ猖獗
スルアリ戦力大ニ消耗セルモ所有困難ヲ排除シテ闘志毫モ屈セス一意任務ノ為ニ勇
戦奮闘遂ニソノ目的ヲ達成シ軍主カト第十一師団方面トノ連絡路ヲ開拓シ且第十一
師団爾後ノ攻勢作戦ヲ容易ナラシメタリ
以上ノ行動ハ攻撃精神旺盛ニシテ任務ノ貫徹ニ一意邁進セルモノニシテ以テ全軍ノ
模範トスルニ足ル仍て茲ニ感状ヲ授与ス

昭和十二年十一月三日

上海派遣軍司令官 陸軍大将正三位 松井 石根
勲一等
功四級

○戦闘の状況

9月13日 各隊予定の如く八時行動開始・聯隊本部及予備隊は田家巷南側本道路上に
行軍縦隊に集合、前進を開始す。九時頃聯隊本部李家木橋附近に到着せ
る時、小顧宅方向より盛なる機関銃火を受けたるを以て、一時路傍に停
止し、敵状地形を偵察すると共に、第三大隊と連絡を取るも、電話連絡
なき為、頗る困難を極む。

十時、予備隊たりし第六・第七中隊を小顧宅に向ひ攻撃前進せしむ。当
時聯隊本部は本道路のみ前進せる為、正面にありし第三大隊と連絡切
れ、且つ小顧宅を唐宅と誤認せるを以て、遂に第三大隊の右翼に進出す
るに至る。聯隊本部は十二時三十分李涇塘に進出す。独立機関銃大隊配
属せられたるを以て、第二大隊の左に連繫し小顧宅を攻撃せしむ。十五
時三十分第六中隊、第十中隊と連繫し小顧宅を占領す。

本日の戦死者歩兵准尉穂積孫一。

9月14日 第一大隊は昨夜来伺家宅の攻撃を続行するも、掩蓋機関銃の側防、「ク
リーク」の障碍等に依り攻撃意の如く進捗せず。第二・第三大隊も同様。
本日の戦闘に於て武田二郎中尉及小島吉光少尉は、壮烈なる戦死を遂
ぐ。

9月15日 右第一線は呉家橋に対し引続き攻撃を実施。残敵頑強に抵抗せるも十一時
遂に呉家橋を占領す。右側掩護隊は朝来何家店の掃蕩を実施するも、曹
家巷・北朱店より射撃を受け、且つ何家店の残敵は「クリーク」及び家
屋に掩護せられ戦闘意の如く進捗せず。十八時伺家店東北端に進出せる
に過ぎず。

本日の戦闘に於て白川敬親少尉及高木儀夫准尉は壮烈なる戦死を遂ぐ。

9月16日 午後二時、砲兵の候家宅・小顧宅に対する集中射撃に膚接して、第一線は

攻撃前進に移る。第一線は一意攻撃を続行せしめ、敵側防火大にして意の如く進捗せず。中井友助准尉は壮烈なる戦死を遂ぐ。

9月17日 午後零時より候家宅・小願宅に対し砲兵の試射開始せらる。第一線よりも其弾着手に取る如く報告し、砲兵の射撃を援助す。十四時十五分より十分間小願宅に対し1BAの集中射撃、終了と同時に第三大隊攻撃前進に移り、殆ど抵抗を受くることなく十四時五十分小願宅を占領す。敵は死体約二〇〇を遺棄し、北朱店方向に退却す。其れに対し迫撃砲射撃を加へ徹底打撃を与へたり。

十四時三十分頃、宮本敏太郎少尉の指揮する何家店守備隊、当面の敵退却の状況を見、独断北朱店に対する攻撃を断行し、十四時五十分同地を占領す。

十四時五十五分より十分間、東姜候家宅に対し1SA、1BAの集中射撃開始。終了と同時に第二大隊攻撃前進に移りたるも、百年橋・馬家宅方向より側防掩蓋機関銃火盛にして、戦闘意の如く進捗せざるも日没となり、敵前概ね二〇米の線に達し夜襲を準備す。

9月18日 正午より配属砲兵・直協砲兵を以て祭家宅・呉宅・北王宅南部々落に対し制圧射撃開始。第一線は攻撃前進を開始す。右大隊の攻撃は順調に進展、十二時四十分朱家宅・祭家宅を占領す。本夜は現態勢を以て夜を徹す。

9月19日 御下品を各隊に分配す。

第一大隊は南朱店を攻撃、十二時三十五分を占領。

本日、歩兵第二十二聯隊を初めて旅団長の指揮下に復帰せしめられしを以て、歩兵第十二聯隊の左に之を使用するに決し、歩兵第二十二聯隊の田中大隊を以て周家宅を攻略せしめ、我第一大隊を以て南北朱店を攻略すると共に、田中大隊の攻略を容易ならしめたり。

此の日、陸軍歩兵大尉田中睦夫、過般来の戦闘に於て三回負傷、勇戦奮闘、遂に鬼籍に入れり。

9月20日 九時、聯隊長安達二十三少佐、第一線を巡視す。

第一回補充員として上等兵以下一二〇名到着、之が教育指導のため、寺島信美曹長を派遣、受領並教育に任せしむ。防毒面を受領分配。補充員に鉄帽なきため、戦死傷者の〔もの〕を利用に力む。

9月21日 二時、第三大隊の一部、梅尤宅東方無名部落を占領す。九時より陸軍機爆撃を開始せるも、第一線に対する効果十分ならず。

本日、准尉以下四一八名の補充員を受領す。

9月22日 昨夜来、張家宅方面に於ては敵屢々逆襲し来り。猛烈なる手榴弾戦を演じ、遂に第五中隊長佐藤忠彦大尉負傷するに至るも之を撃退せり。

七時二十四分梅尤宅に対する砲兵の集中射撃終了と共に、第一大隊攻撃

- 前進を開始し、七時五十分北部梅尤宅を占領す。
- 9月23日 午前八時三十分より王家宅に対し砲兵試射開始。十時四十五分より十五分間王家宅に対し砲兵の集中射撃開始、終了と同時に第二大隊攻撃前進を開始し、十二時四十五分第十二中隊の一部は先づ北部王家宅に進入し、
- 一時稍々過ぎ之を占領す。第一・第三大隊は夫々火力を以て第二大隊の戦闘に協力す。山下政一准尉、壮烈なる戦死を遂ぐ。
- 9月24日 第一大隊正面の敵頑強に抵抗を持続し、容易に掃蕩し得ず。十一時十五分砲兵射撃を実施するも其の成果大ならず。一時間余にして之を中止し、
- 独力攻撃を実施し、十三時五十分之を占領す。十二時十分、第二大隊に攻撃前進を命ず。十三時二十分揚家宅を占領、引続き厩灣に向ひ第六中隊攻撃を続行し、十四時四十五分遂に之を占領し、上海街道に於ける第一歩を印す。
- 本戦闘に於ける第二大隊の攻撃極めて迅速巧妙なり。
- 十四時十分北部梅尤宅の守備を交替し、十六時三十分第三大隊南部梅尤宅に対する攻撃を実施し、十七時十分遂に之を占領す。
- 9月25日 第二大隊は、右翼隊の左翼陶家宅附近進出の状況を知り、十時殷家宅に対し攻撃前進を開始し、十時三十分之を占領す。此の間砲兵を以て南部陶家宅の制圧を要求す。第二大隊は第五中隊を更に北朱宅に前進せしめ、
- 浅間部隊と連絡せしむ。十二時三十分第二大隊長梶佐古景行少佐、各中隊長を集め命令下達中敵迫撃砲弾を受け負傷、副官も同時に負傷、野村寛大尉は本迫撃砲破片に依り壮烈なる戦死を遂ぐ。
- 第三大隊は十時頃実施せる砲兵集中射撃に膚接して攻撃を開始し、十四時北部郭家宅を占領す。本戦闘に於て柏正一准尉は壮烈なる戦死を遂ぐ。
- 9月26日 十時過ぎより協力砲兵陶家宅・金家宅に対する試射開始す。歩兵第二十二聯隊は概ね十三時頃前進を開始せるも、大なる状況の変化を見ず。十三時五十分陶家宅に対し焼夷弾射撃を実施するも効果大ならず。
- 十六時二十五分第一大隊攻撃前進に移り、十七時頃陶家宅東方「クリーク」の線に進出す。十七時三十分砲兵の集中射撃を実施するも、側防火大にして遂に突入するに至らず。
- 第三大隊は電話不通のため状況不明なりしも、金家宅前方二〇〇米附近に近接しあり。此に於て聯隊は現態勢を以て夜を徹せり。
- 9月27日 予め協定せる所に基き九時二十分重砲を以て陶家宅の掩蓋機関銃（東端

の二階建の家)に対する破壊射撃を開始す。山砲の一部を以て適時制圧射撃を実施せしむ。十六時二十分叫陶家宅に対し三分間の集中射撃を実施し、其の最終弾に膚接して第一大隊攻撃前進を開始し、煙幕を利用し陶家宅北側「クリーク」の線迄進出するも、遂に之を奪取するに至らず。

第三大隊は、概ね現在地に於て火力を以て第一大隊の戦闘に協力す。午後第三大隊の聯隊砲半隊を第一大隊に配属す。

聯隊は現態勢を以て夜を徹せり。

本日、歩兵大尉金丸師範以下二十一名の幹部(小隊長以上)の補充を受け〔た〕り。梶佐古少佐負傷後の経過不良、遂に鬼籍に入れり。

9月28日 第一大隊は、砲兵射撃に適する如く陶家宅東方「クリーク」の線迄後退。七時より重砲は陶家宅東端、山砲は陶家宅北側の掩蓋機関銃に対し試射を開始す。十時四十分より一分間陶家宅に対し山砲を以て集中射撃を実施し、第一大隊は攻撃前進を開始せるも、敵側防火尚盛にして大なる戦果を得ず。十七時第六中隊を第一大隊に増加す。第三大隊は火力を以て第一大隊の戦闘に協力するの外、大なる状況の変化を見ず。

9月29日 殷家宅に戦闘司令所あり。八時三十分頃より砲兵金家宅・周王前・南朱宅に対し試射を開始し、十四時頃より陶家宅の破壊射撃、特に山砲を以て掩蓋機関銃を求めて射撃せしむ。十七時陶家宅に対し三分間の砲兵集中射撃を実施し、第一大隊攻撃前進を開始するも、大なる戦果を見ず日没となる。二十時、第三中隊陶家宅に夜襲を執行するも敵掩蓋機関銃の妨害を受け、中隊長負傷し、一時に三十余名の損害を蒙り、且つ勇戦奮闘せるも遂に奪取するに至らず。聯隊長安達大佐、戦闘司令所に於て戦闘指導中、十二時三十分敵迫撃砲の集中火を受け受傷す。部下の督促をしりぞけ一意戦場に止まらんとせしも重傷なるため、部下は故に之を衛生隊に後送す。

爾後歩兵少佐道下義行、聯隊長代理をなす。

第三大隊長代理大尉 村井毅治。

9月30日 第一大隊は攻撃陣地の推進に依ることに決し、第一線は極力工事を実施す。工兵小隊は転属す。

第三大隊は、一時を期し第十二中隊をして金家宅の敵を夜襲せしむるも敵頑強にして遂に該陣地を奪取するに至らず。中隊長中尉松下辰雄は壮烈なる戦死を遂ぐ。二十時三十分左翼隊は概ね今明日現在の位置に停止して態勢を整へ、爾後の前進を準備し夜を徹す。

10月1日 各大隊は人員を補充、兵器・糧秣の補充をなし、待機の姿勢をとる。

10月2日 十五時、第一大隊の一部陶家宅南方に位置。陶家宅の敵陣地の退路の遮

- 断を命ず。之が為、第一大隊は第三中隊をして之に当らしめ、日没後行動を開始せしむ。十六時藤沢直助少尉を沈家橋に派遣し同地を守備せしむ。
- 10月3日 当面の敵退却せるを知り、九時三十分第一中隊は敢然陶家宅に突入し、十時二十分完全に之を占領す。為に当面の戦闘の進捗に一大影響を与ふ。
第一大隊は引続き周王前を攻撃し、十一時該地及其の南方無名部落を占領す。
第三大隊も之に策応し攻撃を開始し、十一時三十分第九中隊先づ金家宅を攻撃し、十三時四十分第十一中隊南朱宅を攻略す。
- 10月4日 十時より陸軍機北覽溝・周家宅・丁家宅に対し爆撃を開始す。十時三十分砲兵は金家店及其北方「クリーク」の敵に対し制圧射撃を実施す。第三大隊は其の成果を利用して攻撃を開始し、第十一中隊先づ南朱宅南方二軒屋を占領し同地を確保す。十三時三十分より金家店及其南方無名部落に対し砲兵射撃を開始し、第一大隊は攻撃前進に移り、右翼方面に於ては金家店東方「クリーク」の線に、左翼方面に於て金家店南方無名部落に達し日没となる。敵の兵力・団体号、兵力約四百名、第七十七師、師長羅林（俘虜の言に依る）
- 10月5日 五時、第一大隊第三中隊〔は〕工兵小隊と協力して金家店南方無名部落に対し夜襲を決行し、壮烈なる白兵戦を演じ、中隊長高畑寿夫少尉以下二十名一団となり敵陣内に殺到し、勇戦奮闘せしも遂に奪取するに至らず、中隊長以下二十三名の生死不明となる。
- 10月6日 十四時四十分より金家店附近の敵の一部退却の情況を目撃し、十六時第一大隊金家店東方無名部落の攻撃を開始し、十七時二十五分之を占領し、
金家店の敵に対する攻撃を準備す。
第三大隊は敵陣地奪取の可能なるを認め、薄暮より攻撃を開始し、十九時齊家村を占領し、引続き西方部落に対し夜襲を準備す。
- 10月7日 一時、第一大隊は大なる抵抗を受くることなく東部金家店に進入し、五時確実に之を占領。引続き丁家宅を攻撃、八時之を占領。
第三大隊も五時一ヶ中隊を以て齊家村西方無名部落を占領し、引続き周家宅を攻撃、九時之を占領す。
第二大隊は六時藤沢小隊を以て北部北覽溝を占領、九時輕易なる抵抗を受けつゝ残敵を掃蕩し、北覽溝南端に達し之を確保す。
- 10月8日 十二時三十分、砲兵の集中射撃終了と同時に第十中隊未だ陣地に就かざるに先立ち突入し、壮烈なる格闘の末遂に小宅北方三軒屋を占領す。残

敵尚頑強に抵抗せしも十七時十分遂に之を掃蕩す。敵守備兵約二〇〇名、

銃剣にて刺殺。

第一大隊、16時包家宅を占領。第二大隊は早朝より王宅・王家宅の敵と相対峙しあり。王家宅及其の東方「クリーク」の線には掩蓋機関銃一〇を有し、再三逆襲に転じたるも悉く之を撃退せり。

10月9日 七時、第一大隊、包家宅を占領。砲兵をして爾後第一大隊王家湾攻撃に協力せしむ。十四時砲兵の三分間の集中射撃、之に膚接して攻撃前進。十四時四十分王家湾を占領。十五時第一線をして半氷久的陣地の構築を命じ、残余は後方集結を命ず。

10月10日 第二大隊を朱家宅に前進せしめ、孫家宅に対する攻撃を準備せしむ。第三大隊をして明未明森部隊と交替し、周王前南方無名部落に至り聯隊予備たらしむ。

10月11日 第一大隊は昨夜の命令に基き無名部落の攻撃を準備し、十五時三十分配属砲兵協力のもとに攻撃前進を開始し、小湾宅及び其の東北方及び北方無名部落より盛なる側防火を受けつゝ敵に近接し、十七時頃には敵前約五十米に達するも、敵火甚だしく遂に突入するに至らず、再度敵の逆襲を受けたるも之を撃退せり。

○南翔北方附近の戦闘（十月十一日～十月二十四日）

10月11日 聯隊は右第一線となり、朱家宅西北方約三〇〇米無名部落及朱家宅西端の線に攻撃を準備し、先づ孫家宅次に小湾宅の敵第一線陣地を攻略したる後、光家宅・陳巷の敵第一線陣地を攻略し、爾後の前進を準備す。重点を右翼方面に指向す。十五時三十分配属砲兵協力の下に攻撃前進を開始し、小湾宅及其の東北方及び北方無名部落より盛に側防火を受けつゝ敵に近接し、十七時頃敵前約五十米に達するも、敵火烈しく遂に突入するに至らずして日没となり、再度敵の逆襲を受けたるも、之を撃退せり。本戦闘に於て第二中隊長金丸大尉負傷す。第二大隊は此の間火力を以て第一大隊の戦闘に協力し、特に十七時頃小湾宅附近より増加する敵に対し大なる損害を与へたり。

10月12日 本日の戦闘に於ては前日に引続き壮烈なる白兵戦を行ひ、敵に与へし損害約二〇〇、内遺棄死体約一〇〇に及び、俘虜十三名を捕獲せり。

10月13日 前日に引続き戦闘を続行せしも意の如く進捗せず。以て本夜先づ渡河設備及障碍物の破壊を実施せり。

10月14日 昨日に引続き依然重点を第二大隊正面に保持し攻撃を続行す。敵陣地極めて堅固にして銃眼等巧に構築しありて渡河設備極めて困難なり。

10月15日 聯隊は依然重点を孫家宅正面に保持し攻撃を続行。砲兵は十六時頃より射撃を開始せるも、効果大ならず。

10月16日・17日・18日・19日 依然戦闘は進捗せず。

10月20日 本日より約一週間全く休止の予定を以て、兵の教育訓練を開始す。

10月22日 正午、旅団長来隊せられ訓示せらる。

訓示

一、白兵主義に徹底するを要す。如何に砲撃・爆撃を実施するも結局歩兵の突撃に依らずんば、陣地を占領すること能はず。

二、準備計画を周到にせよ。

三、大局を判断せよ。

10月23日・24日 訓練を続行す。

◎自昭和12年10月25日至全11月11日

○南翔附近に於ける戦闘

歩兵第12聯隊の南翔附近に於ける戦闘とは、大場鎮付近に連る南翔東方張巷、馬路湾、城隍橋の線を主抵抗線とせる一大防禦線にして堅固なる陣地に対する攻撃なり。而して陣地設備の堅固なりしは全戦闘を通じ其の最たるものにして、掩蓋銃座数多きは勿論、是等はすべて既設的のものにして其の掩蓋の如きは鉄板を数枚重ね此の間に土砂を挿入しあるもの、或いは数層より成るもの等あり。四方を射撃し得る如く構築しありて、友軍の15榴程度にては破壊し得ざる状況なりき。又、敵は各種火器を南翔付近に集結しありしが如く、就中15榴・迫撃砲の集中射を受くること各方面に於いて1日に3、4回に及ぶことありたり。聯隊は此の頑強なる敵に対し、或は攻撃作業により或いは積極的手段を以て逐次敵に肉薄し、敵の十数回に亘る大規模なる逆襲を排除し以て師団主力方面の作戦を有利たらしめ、次で師団の戦果拡張に際しては此の堅壘を力攻し終に11月11日敵陣地の一角を占領し続いて12日早朝南翔方向に敵を追撃せる。靱強且堅固なる陣地の後は敵全線に亘り退却し、現在迄の陣地戦をして爾後の追撃へ轉換せしめたる重要意義を有する戦闘なりき。

10月25日

一、功績調査に関し研究す。

二、押収手榴弾・浮囊船の使用法の普及を行う。

10月26日 歩兵第十旅団長は、部下旅団(22欠)・山砲兵第11聯隊(第2大隊欠)・衛生隊(3分の2欠)を指揮し11時出発。歩兵第22旅団の後方陸家宅南方地区に前進し兵力を集中すべき師団命令に基づき聯隊は厝湾を先頭とし、集合前進を開始す。

10月27日 本朝中央隊長天谷少将は、師団は左翼隊の一部を以て当面の敵を攻撃せし

め、左翼隊主力を以て浪江桁附近に進出して敵の退路を遮断すべき企図を承知し、中央隊当面の敵の右翼を包囲攻撃せしむる目的を以て、第1大隊（第3・第4中隊欠）を直轄使用し、敵前方向に前進せしめ陸家宅を攻撃せしむに決す。第1大隊は2時～3時の間に於て永津部隊と配備を交替し、午前中主として敵状地形の搜索及隣接部隊との連絡を謀れり。

10月28日 第一線は引続き攻撃を続行す。9時30分配属及協力砲兵を以て盛家宅・陸家宅に対し攻撃を開始し主力陸軍機は謝家宅・張仙廟・王塘橋に爆撃を開始す。9時45分第2大隊第5中隊東部艾婁濠を占領す。当時第1大隊は陸家宅及張家宅を占領、和知部隊は甘沙子・巷頭橋の線に進出しあり。第二大隊は引続き第六中隊を第一線に増加し、張仙廟を攻撃す。第三大隊は昨日より攻撃陣地を推進し払暁迄に概ね敵前七、八十米に達す。盛家宅に対する砲兵射撃終了と闘時に攻撃を開始したるも、敵頑強にして意の如くならず遂に日没に入る。第一大隊は、11時頃陸家宅より王塘橋に向ひ攻撃前進せんとの通報ありしも爾後の消息不明なりき。

10月29日 第一大隊は午前五時攻撃前進し大なる抵抗を受くることなく八時吳家坎を占領す。早朝戦車中隊協力するの通報に接し七時過ぎ中野徳次郎少尉を陸家宅に派遣し戦車中隊と連絡せしむ。連絡の結果道路悪しき為、戦車使用不能なるを知る。之が為第一大隊をして戦車進出のため道路を修理せしむ。八時～九時の間、空爆並砲兵射撃を開始。九時より三分間集中射撃、その最終弾に膚設して第一線は攻撃前進を開始。十四時第一大隊王塘橋占領。第二・第三大隊は謝家宅及張仙廟に対し攻撃を続行するも、奪取するに至らずして日没となる。十八時薄暮攻撃を第二・第三大隊に命ずるも成功するに至らず。現在員概数、人二九〇〇、馬五九〇。

10月30日 敵の一部は小南翔・馬路湾方同より第一線に対し増援しあり、本朝五時第三大隊は謝家宅・盛家宅に対し払暁攻撃を執行し、第十中隊は盛家宅、第十一中隊は謝家宅の敵第一線陣地を占領す。本戦闘に於て特に第十一中隊の戦闘振目覚ましく、遂に中隊長池田中一大尉・小隊長平島徳明少尉・細川荒太准尉壮烈なる戦死を遂げたり。又井上正重少尉も戦死す。九時三十分協力戦車到着。聯隊長代理道下義行中佐は之を先づ張仙廟に使用し、全線をして攻撃を開始せしむ。九時四十分頃張仙廟の敵謝家宅方向に退却の徴あるを看破し、第二大隊は戦車と協力して同陣地に突入、該地を占領せり。十時四十分第三大隊は謝家宅を占領す。約一中隊の敵張巷方向に退却、

配属山砲をして射撃、多大の損害を与へたり。

敵の兵力・団隊号、第十六軍五十三師百五十七旅三一七団及三一八団。

兵力約三千、遺棄死体約三百。

我現在概数、二八五〇名、馬五九〇頭。

- 10月31日 砲兵は予定の如く十三時馬路湾に対し射撃開始。十五時十分集中射撃開始、第三大隊は其の最終弾に膚接して十五時三十分陣地に突入、其の第一線陣地を占領、之を確保す。第一・第二大隊は大なる情況の変化を見ず。坂井美雄准尉は壮烈なる戦死を遂ぐ。
- 11月1日 聯隊は主として各当面の敵状地形を搜索す。
- 11月2日 第三大隊を以て十六時より砲兵の射撃に引続き西部陳宅を攻撃す。敵頑強に抵抗し其のまゝ夜を徹す。西岡正和少尉、壮烈なる戦死を遂ぐ。
- 11月3日 聯隊は任務に基き依然前日に引続き敵状地形を搜索、又工事の補強を実施す。
- 11月4日 主として前面の敵状地形を搜索す。
- 11月5日 前日に同じ。
- 11月6日 第三大隊の正面に若干の敵出撃ありたるも、敵は五六十の遺棄死体を残して退却せり。
- 11月7日 聯隊長、退院帰隊せらる。爾後聯隊の指揮は自ら掌る旨、各隊に令す。将兵の志気大に昂れり。各隊は任務に基き前面の敵情地形の偵察を行ふ。
- 11月8日 聯隊は依然任務に基き敵情地形の偵察を行ふ。
- 11月9日 主として前面の敵情地形の搜索を行ふ。戦闘の為の諸準備をなす。
- 11月10日 十四時二十分より山砲を以て敵掩蓋機関銃座の破壊を逐次開始したれ共、射弾少きため効果不充分なり。十五時三十分、第一線大隊に攻撃前進を命ず。第一線各大隊は一斉に攻撃を開始し、同時に戦車一中隊も戦闘に加入し、土地堂一城隍橋の敵陣地を猛射し、極力歩兵の前進を援助す。歩兵の攻撃前進開始と共に山砲は馬路湾・濠楼方向の敵側防火の制圧に努む。然れ共、弾薬少きため其の効果充分ならず。十七時二十分飛行機、馬路湾・小南翔を爆撃し、敵に相当の損害を与へたり。歩兵の前進逐次進捗し、第一大隊の一部敵陣地の一角を占領す。然れども第一線、城隍橋東南北に通ずる「クリーク」に近接するに従ひ、濠楼・城隍橋南方地区よりの敵の側防火猛烈を極め、又敵砲兵集中射撃のため第一線は負傷者続出し、攻撃意の如く進捗せず。第一線は概ね城隍橋一小南翔を通ずる「クリーク」の東岸の線に進出し、日没となる。
- 依て聯隊は概ね当時の態勢を以て夜を徹し、明日の攻撃を準備せり。
- 10月11日 聯隊は現在の態勢を以て本十一日前面の敵情地形の搜索中、夜に入る。

前半夜に於て盛なる敵の射撃を受けたるも、後半夜に於て急遽銃砲声止む。聯隊長は敵退却の兆あることを看破し、第一線部隊をして敏速なる敵情の搜索を行はしむ。果せる哉、予想せる如く敵は算を乱して常熟方向に退却しあり。即ち聯隊は此の敵を機を失せず急追して、南翔南端に先づ集結、次で常熟に向ふ敵を追撃するに至れり。

敵の戦死約二千。我戦死一一九名、負傷三一四名。

本戦闘間、当面の敵兵力及団隊号、左の如し、

一、盛家宅・謝家宅・張仙廟・王塘桁敵第一線の兵力は約三千にして、馬路湾・張巷には約千名守備しあり。軍情報に依れば、南翔の総兵力約七万なりと。

二、団隊号、謝家宅・張仙廟附近第五三師第一五七旅、張巷・馬路湾附近第十一師。

尚、俘虜の言に依れば、南翔には六ヶ師あり、其の区分左の如し、三十三師、五十三師、十八師、十四師、十一師、六十七師。

彼我の損害の概数、

1、敵に与へし損害、

遺棄死体、謝家宅附近 350、張仙廟附近 230、馬路湾附近 150、計730。

以上より判断し戦死傷約二千余あり。

2、我が損害、戦死将校五、准士官以下二〇三名。

自昭和十二年十一月十二日至昭和十二年十一月十九日

○常熟に向ふ追撃戦闘

本戦闘は、南翔附近の戦闘に引続き実施せられたる一大追撃戦にして、戦闘の局面に一転機を画したるものなり。現在迄頑強に抵抗したる敵も終に算を乱して潰走せり。聯隊は昼夜兼行、数日に亘り之を急追し、到る処に敵を撃破して終に常熟に到達せり。而して本戦闘間は一日の行程数里に及び、糧食の補給も亦十分ならず、而も到る処に敵敗残兵の抵抗を受け、加之雨の為、道路泥濘化し、人馬の疲労相当大なるものあり。

然れ共、将兵の志気益々旺盛、欠乏に堪へ、堅忍不拔以て目的を達したる追撃戦なり。

11月12日 師団は敵を練祁川の線に追撃するに決し、左の如く行軍序列を定む。

1、行軍序列 追撃隊 歩兵第二十二旅団

本隊（同行軍序列）

歩兵第四十四聯隊のIヶ大隊（前衛）

師団司令部

山砲兵聯隊（一大隊欠）

2、聯隊は本隊となり第三・第一・第二大隊の順序を以て騎兵小隊の後方を練祁川の線に向ひ追撃す。

聯隊は二十時南翔西南端を出発。旅団司令部の後方を聯隊命令に基く行軍序列にて西高涇に向ひ前進せり。

11月13日 師団は依然攻撃を続行し、太倉西北側地区に進出す。各師団も右より第一師団・第三師団・第十一師団・第九師団各西北進追撃す。

11月14日 聯隊は命令に基き劉河の線に前進す。途中「クリーク」至る所に存在し、或は「クリーク」に架橋し、或は之を迂回し前進す。即黄涇より劉河の線迄は直距離約十軒なるも、之に約八時間を要せるを見ても「クリーク」地帯の通過如何に困難なるかを物語りて余りあり。十六時太倉西側張家宅に到着。十七時太倉城西門出発。太倉・支塘鎮道を支塘鎬に向ひ追撃す。

11月15日 三時四十分、支塘鎮西南端に到着し、大休止す。旅団命令に基き追撃を開始。途中大なる敵の抵抗もなく古里村に到着。

11月16日 第二大隊は昨夜来、顧浜・張家基の敵を攻撃中、黄涇方向よりの敵の側射熾烈なり。十一時、第八中隊は軽装甲軍と協力し燃焼中の青塘東側の橋梁を占領確保す。

11月17日 聯隊は追撃隊命令に基き兵力を集結し、爾後の前進を準備すると共に、戦力の保持増進に勉む。第二大隊は佐々木部隊の指揮下にありて十六時青塘西端に進出し、該地を占領す。日没と共に歩兵第三十三聯隊と交代し、呉宅頭附近に於て佐々木旅団の予備隊となる。師団の将来、崑城湖を経て莫城鎮方向より舟艇機動に依り、常熟背後に進出するの企図を予想し、第三大隊をして青塘—五渠鎮の「クリーク」の情況偵察並に舟艇徴発蒐集を命ず。

11月18日 本日より糧秣の補充は、主として徴発せる舟を利用し運搬。

森田進中尉をして崑城湖及其の西岸附近の敵情を搜索せしむ。

自昭和十二年十一月二十日至昭和十二年十一月二十六日

○無錫に向ふ追撃戦闘

11月19日 天谷支隊は準備の出来次第、古里村を出発し、水上機動に依り崑城湖西岸に上陸し、常熟・無錫道を遮断し、第十六師団の攻撃を容易ならしむべき命に依り、之の準備をなす。

11月20日 第三大隊は謝家村（常熟西方）北方に進出し、常熟—無錫道を遮断す。聯隊本部及第一大隊砲兵第七中隊は崑城湖を渡り莫城鎮附近に進出しあり。当時聯隊長は第三大隊の戦果を拡張すべき企図を有せり。当時常熟附近の敵に関しては、聯隊本部莫城鎮附近に到着せし頃、西方に向ひ退却中なりとの情報を受く。蘇州方面の敵は蘇州—無錫道を無錫に向ひ

退却中にして、目下第九師団は此の敵を追撃中なりき。

- 11月21日 先遣隊（第一大隊の主力及び砲兵の主力）は、昨日の命令に基く部署を以て五時三十分莫城鎮を出発、発動艇の到着遅れのため出発時間予定より若干遅れたり。途中敗残兵を掃蕩しつつ前進し、十二時三十分漕湖を渡り、其の西南方部落に於て大休止を実施す。十四時三十分同地出発。河合治大尉を派遣し頭北橋附近の敵情を搜索せしむ。
- 11月22日（雨） 井出旅団当面の敵は尚抵抗を持続しあり。尚肅家里附近に於ても依然敵抵抗しあり。聯隊長は他方面の転進即漕湖より同湖西方「クリーク」を利用して敵を無錫に向ひ追撃せんとの案は、主として受けたる任務及発動艇の燃料の不足のため、之を実施するに至らず。聯隊長の企図は鉄道線路西側地区に拠点を占め、後続部隊一部の来着を待ちて、当面の敵を攻撃するにあり。新田弘中尉の率ひる一小隊を以て鉄道の西に拠点を占領せしむ。合田正実少尉をして鉄道線路附近に進出するための道路を偵察せしむ。河合治大尉をして地方舟及物貨を徴発せしむる等諸般の準備をなす。
- 11月23日（曇） 聯隊は本夜攻撃の準備を完成し、勉めて多くの兵力を集結し、明朝当面の敵を撃破し、無錫に進出す。
- 11月24日 十五時十分、歩兵勇躍攻撃前進を開始するや、砲兵は主火力を紅葉山に指向し、其の弾着頗る正確。機関銃の射撃又適切にして歩兵の前進を援助し、歩砲機の理想的協同により徹底的に敵を圧倒し、敵をして拮抗するの余裕を与へず。遂に一部の敵を退却せしめたるも、第二線「クリーク」の為、第一線部隊の追撃発起、機を失したるため、敵は引返し更に抵抗を持続せり。大隊長は鋭意攻撃続行に勉めたるも、第二線「クリーク」の中大にして且深かりしたため、遂に敵陣地を奪取するに至らずして日没に向ふ。第一線中隊は引続き夜暗を利用して渡河の設備を実施す。是より先、第三大隊は概ね正午頃、第二大隊は日没頃旺安橋附近に到着す。
- 11月25日 第二線「クリーク」に渡河の設備を完了せる第一大隊は、七時砲兵の射撃開始と共に攻撃を開始す。敵動揺の色極めて濃厚なり。八時過ぎ第一大隊は一部の残敵を撃破し追撃に移る。聯隊長は直ちに第一大隊に属する部隊を以て概ね旺安橋附近に集結せしむ。
- 第一大隊は残敵を撃破しつつ逐次無錫南端に近接す。第三大隊より、第一大隊に追尾して将校斥候を派遣し道路を偵察せしむると共に、篠田健一中尉をして情報を蒐集せしむ。
- 第一大隊、無錫東南端に達するや、敵は予め市内に準備せる工事に依り「クリーク」家屋等を利用し頑強に抵抗す。依て家屋を破壊しつつ攻撃を

続行、敵に近接するや、敵は遂に火を放ちて後方無錫南門方向に退却す。

戦死、陸軍歩兵少尉山本一重。

11月26日 無錫攻撃。第一大隊は昨二十五日に引続き家屋を破壊しつゝ南門に近接す。敵は逐次退却の兆あり。十五時頃南門南方百米の「クリーク」の線に進出す。十六時重火器・砲兵の適切なる協力に依り「クリーク」前面の敵を撃破し、終に南門を占領す。

第二大隊は莊家浜南方「クリーク」附近の敵既設陣地に遭遇し、攻撃を実施するも終に奪取するに至らずして日没となる。前面の敵は既設陣地に依り且「クリーク」を利用して頑強に抵抗を持続す。茲に於て大隊は夜暗を利用して攻撃の諸準備を整へ、明二十七日早朝を期して攻撃するに決す。

11月27日 聯隊は其の兵力を無錫南門附近に集結し、編成替を実施すると共に、爾後の追撃の為の進路偵察・地方舟の蒐集・行動の研究等を実施し、二十八日主として江南「クリーク」を利用し先づ東沙に向ひ前進するに決す。

11月28日 追撃実施。

聯隊本部は第一梯隊と共に八時無錫を出発、東沙に向ふ。途中第一梯隊は孟里鎮附近の敗残兵を掃蕩しつゝ前進す。十三時黄林鎮に到着し、戚野堰附近には大なる敵なきが如きを知り、直ちに常州に向ひ追撃せしむ。

六時聯隊本部は砲兵を招致し、黄林鎮を出発し、第一梯隊に追及。十七時常州南方に敵陣地帯ありて、第三大隊及第十六師団の攻撃準備中なる報告に接し、十八時三十分丁堰鎮に上陸し橋村に至る。

当時、第三大隊は既に十五時過橋村附近に達し、同地に兵力を集結し、白家橋附近の敵陣地に対し攻撃準備中なり。

当時、第二梯隊以下は所命の如く第一梯隊の後方を江南「クリーク」に沿ひ主として水路を利用して前進中なりき。

○常州攻撃

第三大隊（第九中隊欠）は、本道（江南「クリーク」に沿ふ無錫・常州道）以西の地区より敵を追撃して、普濟橋・丁家路に向ひ前進す。第二大隊は降子橋方面より汪家村附近に前進す。第二大隊は二十時三十分一ノ堰鎮に到着す。

11月29日 第一線大隊は本払暁より行動を開始す。砲兵を降子橋に前進せしむ。第三大隊は東倉附近の敵陣地に対し一部を当て、主力を以て常州市街を南方に迂迴し、普濟橋に前進。聯隊本部は十時橋村を出発し降子橋に向ひ前進。十二時同地に於て第二大隊に追及す。第二大隊は十二時半行動開始。汪家村に向ひ攻撃前進。敵の抵抗を受くることなく同地南方了義鋪

を占領し、引続き木匠街附近を攻撃し、十三時十五分同地を占領す。是より先、第三大隊は十三時三十分頃に常州西北端普濟橋を占領し、同地附近に兵力を集結しあり。歩兵第十九聯隊の右に連繫し常州を攻撃し、二十九日之を占領し常州城内に入る。第九師団は歩兵第十二聯隊普濟橋占領後常州城内に入る。

- 12月1日 部隊は休養並兵器・被服の手入をなす。
- 12月2日 午前休養（常州普濟橋）
- 12月3日・4日 軍紀教練を実施。
- 12月5日 聯隊は七時三十分常州出発、二十時二十分丹陽着。各隊は設営者の誘導に依り、各大隊毎に宿營し、宿營地毎に警戒せしむ。

○鎮江攻撃

- 12月6日 聯隊は八時三十分丹陽出発、鎮江に向ひ前進。途中十時三十分前衛六村南側に達したる際、前衛より派遣せる先遣隊六村附近に陣地を占領せる敵約一ヶ小隊を攻撃中なるを知り前兵直に之に協力、該敵を攻撃駆逐す。退却せる敵を追撃しつゝ十四時前衛揚村北側に達せし時、竇村・繆家店附近に約一ヶ小隊の敵陣地を占領しあるを発見し、前衛は直ちに該敵を攻撃す。時に聯隊砲到着、前衛司令官の指揮下に入り、十四時二十五分該地を占領。敵は更に官唐橋・顧楊村附近の陣地に抛りて抵抗す。聯隊は第三大隊を右第一線とし本道に沿ふ地区より、第一大隊を左第一線とし本道以西に展開攻撃す。十六時、第二大隊到着。第三大隊の右に展開、邵家北側高地を攻撃。各第一線大隊は猛烈に攻撃を実施し、官唐橋・顧楊村・邵家高地の一部を占領したれ共、敵は頑強に抵抗し、日没となる。岡本邦見少尉及谷本辰次郎准尉は壮烈なる戦死を遂ぐ。
- 12月7日 七時四十分より前日に引続き攻撃を開始す。十一時三十分、第三大隊は官唐橋を、第一大隊は顧楊村を占領す。十三時十分より鷄籠山東西の線の敵陣地に対する山砲射撃開始と共に、各第一線大隊は攻撃前進。第二大隊は邵家高地の一部を占領す。
- 12月8日 四時、第二大隊は邵家高地を完全に占領す。敵は算を乱して南京方向に約二千名、揚子江を渡河して約千名、象山砲台方向に約一千名、退却す。揚子江岸に出て敗退する敵に砲撃を加へ、相当の損害を与へたり。十七時、歩兵第十二聯隊は完全に鎮江市街を占領す。此の戦闘に於て敵の兵力約六千、遺棄死体約一千五百。
- 12月9日 鎮江に露營す。
- 12月10日 十四時五十分より先づ重砲を以て焦山寺島を制圧し、I MG、I BiA、III MG、RiA等猛烈に射撃を開始し、敵に多大の損害を与へたり。聯隊は渡

河し攻撃すべき舟艇、丹徒鎮西北方無名島の敵に遮られ到着せず。日没となり攻撃は明日に延期するに決し、第二大隊は象山附近に於て宿營し、
攻撃を準備す。

- 12月11日 五時三十分、第二大隊の一部、丹徒鎮に至り、小発〔小発動艇〕に依り、其の西北方無名島を掃蕩す。十一時飛行隊は該島を爆撃す。十二時海軍との連絡なり、海軍の「カッター」にて十四時三十分第二大隊の一部該島を上陸占領し、次で第三大隊主力も渡河上陸し、十五時完全に占領す。
- 12月12日 十時より本部に聯隊将校全員集合、上海派遣軍に賜りたる御勅諭を伝達す。
- 12月13日 支隊は概ね天谷支隊渡河計画の如く、揚子江を渡河し、揚鎮街道附近揚子江左岸に上陸す。当時既に敵は耿營附近に陣地を占領し、尚其の後方に於て抵抗せんとする情況にあり。支隊は之を攻撃、占領するに決す。
- 12月14日 聯隊は王家庄・揚庄・鼎家庄北端の線に展開し、七時四十分迫撃砲の射撃開始と共に第一線大隊は攻撃前進す。逐次敵は退却を開始す。第一大隊は九時五十五分耿營西端を占領す。第三大隊は十時高庄・裘家庄を占領す。第一・第三大隊は独断敗退せる敵を一意急追し、之を三里橋の陣地に依り抵抗する能はざらしめ、第三大隊は十四時三十分江西義塚を、第一大隊は十五時揚州西南城門を占領す。
- 12月15日・16日・17日・18日・19日・20日・21日
聯隊は揚州中学校に集合、長期滞在を準備す。露營す。
自十二月二十二日至全月三十一日 此の間、揚州に宿營。警備、内務、兵器、糧食、戦死・戦傷・戦病死者・戦傷者等の功績調査、戦没者の慰霊祭等を行ふ。

昭和十三年度

- 1月1日 遥拝式を実施し、天皇陛下の御健康を祈る。
- 2日・3日・4日・5日・6日 将校特別教育を実施。
- 7日 戦場掃除をなす。
- 8日 旅団長天谷少将、観兵式を行ふ。
- 9日・10日・11日 兵器・被服検査を実施。
- 12日 聯隊は南京移駐の準備をなす。
- 13日 前日に全じ。
- 14日 揚州中学を引上げ南京に移転。十九時十分南京中央党部に到着。
- 15日・16日・17日・18日 長期滞在準備。
- 19日・20日・21日 南京市警備を第十六師団と交替、各々任地につく。
- 22日より27日まで 功績調査、戦場掃除。

- 28日 美藤中尉、戦場に出発。
- 30日 香川県慰問使来る。
- 2月1日 聯隊長、江寧鎮及西善橋警備隊を巡視。
- 2日 聯隊主力は南京中央党部より鉄道部に移転す。
- 3日 環境整理。
- 4日 鉄道部内の配備状態を視察す。
- 5日 聯隊長、第三大隊警備地区を巡視す。
- 7日 戦死者慰霊祭を挙行、約一ヶ大隊之に参列す。
- 8日 聯隊長、功績調査の進度査閲のため江寧鎮に出張。
- 9日 功績調査進度査閲（第八中隊）
- 10日 功績調査。
- 11日 紀元節に付、九時四十分より遙拝式を軍政部内広場にて挙行す。
- 自13日～至20日 功績調査
- 21日 恩賜の煙草を下賜せらる。
- 22日 聯隊長、篠田健一中尉外下士官兵若干、上海派遣軍司令官鳩彦王殿下内地御帰還御見送及聯隊の戦跡視察のため、上海に出張。
- 自22日至27日 環境の整理。
- 自26日至27日 避難民を輸送す。
- 28日 生死不明者捜索のため、准尉以下若干名を上海及揚州に出張せしむ。
- 3月1日 聯隊経理検査を実施。
- 歩兵第十二聯隊長 歩兵大佐 安達 二十三
補関東軍司令部附。
- 百〇一師団参謀長 歩兵大佐 西山 福太郎
補歩兵第十二聯隊長
- 歩兵少尉 中野徳次郎
- 任歩兵中尉。
- 主計少尉 広田 新発智
- 任陸軍主計中尉。
- 3月3日 安達大佐の告別式を中央党部にて行ふ。
- 6日 西山聯隊着任。
- 7日 徳武新太郎少尉、遺骨整理のため上海に出張。
- 8日 篠田健一中尉、安達少将閣下護送のため上海に出張。
- 9日 聯隊長、南京市内及同市附近の西山部隊の各警備区域を巡視す。
- 10日 陸軍記念日、十二時四十分より旧国民政府跡にて南京宿営部隊の将校の祝宴ありたり。聯隊長は復員帰還に際し、将校に指示を与ふ。三月十日に於ける中隊長以上の官氏名左の如し、

聯隊長	大佐	西山	福太郎	第七中隊長	少尉	島田	芳秋
副官	少佐	諸井	孝介	第八中隊長	少尉	藤沢	直助
副官	准尉	稲田	忠市	二機関銃隊長	少尉	石井	栄
第一大隊長	少佐	加川	勝永	第三大隊長	中佐	道下	義行
第一中隊長	大尉	河合	治	第九中隊長	中尉	森田	進
第二中隊長	中尉	新田	義雄	第十中隊長	大尉	村井	毅治
第三中隊長	中尉	中野	徳次郎	第十一中隊長	少尉	壺井	弥須義
第四中隊長	中尉	守尾	秋蔵	第十二中隊長	中尉	大好	正夫
第一機関銃隊長	大尉	清水	高蔵	第三機関銃隊長	中尉	美藤	武夫
第二大隊長	少佐	山田	友一	第一歩兵砲中隊長	大尉	平山	長作
第五中隊長	中尉	貴志	茂	第二歩兵砲中隊長	少佐	佐伯	侃二
第六中隊長	中尉	赤尾	定則				

3月11日 帰還準備をなす。第三大隊は幕府山方面に示威行軍をなす。十五時より南京中央党部に於て、聯隊将校に対し、聖旨の伝達並聯隊長の帰還に関する注意ありたり。

15日 歩兵第三十四聯隊に南京警備を引継ぎ、正午を以て責任を転換す。

18日 内地帰還のため、十四時南京下関上船。夜は下関に碇泊す。

23日 伏見丸及あさか丸、似島に到着。

24日 伏見丸及あさか丸乗船部隊の検疫を実施す。

25日 全右。

十六時、歩兵第十二聯隊の最後尾船、似島に到着。

27日 伏見丸及あさか丸、七時坂出に到着。官民の歓迎裡に上陸開始。十五時三十分聯隊に到着。聯隊長、訓示する所あり。聯隊本部及第三大隊を主とす。

28日 第二大隊を主とする部隊、十六時聯隊に帰還す。樁中佐以下四百九十三柱の遺骨帰還せり。

29日 十四時三十分、第一大隊を主とする部隊、聯隊に帰還す。